

「2024年度インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部1年 永田 和

私は今回のプログラムに参加するまで海外経験がなく、以前から留学という言葉に対する漠然とした憧れがあった。それを憧れのまま終わらせたくないと思い、短期留学なら挑戦しやすいのではないかと思ったことが、本プログラムに参加したきっかけである。大学での学習は、言語学習、文化体験、共同研究がメインだった。言語学習では、毎日3時間の語学学習を通して、私は新しい言語を学ぶことの楽しさを改めて実感した。最初は授業についていくのがやっとで焦りを感じたこともあったが、次第に授業中に先生が話すインドネシア語がところどころ聞き取れるようになり、成長を感じてうれしかった。決して流暢に話せるようになったわけではないが、片言のインドネシア語を使って現地の方と会話をした経験が自信につながったように思う。文化体験では、インドネシアの食文化についての講義をうけたり民族楽器を演奏したりした。私は特に民族楽器体験が印象に残っており、日本の伝統音楽にはない独特な響きが美しかった。インドネシアの民族楽器は鍵盤系の楽器が多く、日本の伝統音楽との相違を感じた。共同研究では、現地の学生さんと深いかわりを持つことができた。私は自分が専攻している教育に関するテーマを選んだため、生かせる知識があるはずだと思っていたが、授業で学ぶことと実際に現地に行って現地生活している人の声を聴いて知ることとの間には乖離があるように感じ、本やインターネットで見るだけでなく、実際に自分の足で現地に出向いてみなければわからないこともあることに気づかされた。また、そこで仲良くなった学生さんと授業終わりにご飯を食べに行ったり遊んだり密接な関係を気付くことができたことも、大変貴重な経験になった。

2週間の間、大学外でも様々な経験をした。授業終わりに近くのモールや飲食店に行ったり、休みの日にはジャカルタ中心部まで観光に行ったりしたのだが、必然的に自分たちだけの力で現地の方と会話をしなくてはならない場面が多々あった。私はインドネシアにくるまで、初対面の人と話をするのは得意な方だと思っていたし、それはきっと外国に行っても同じはずだと思っていた。しかし実際にインドネシアに着いてみると、最初のうちは全く積極的に行動できなかった。現地の方に話しかけたいと思っても語学の自信のなさがストッパーになってしまっていたのではないかと思う。1週間ほどたった後で、どれだけ言葉が片言でも話しかける度胸と伝えたいという熱意があればだいたいのことは伝わるということに気づいてからは、自ら積極的に行動することができるようになり、これは大きな収穫だったように思う。

私は今回のプログラム参加を通して、私は私が思っているより土壇場で勇気が出ないタイプであることも、逆に新しい環境を自分なりに楽しめるタイプであることもわかり、日本にいたままではきっとできなかった経験ができた。また、現地での勉強がとても楽しかったため、今度はより専門的な内容を長期間かけて学ぶ留学にも挑戦したいと思うようになった。